

# 平城京東市跡推定地の調査 II

第4次発掘調査概報

昭和59年

奈良市教育委員会

(表紙)

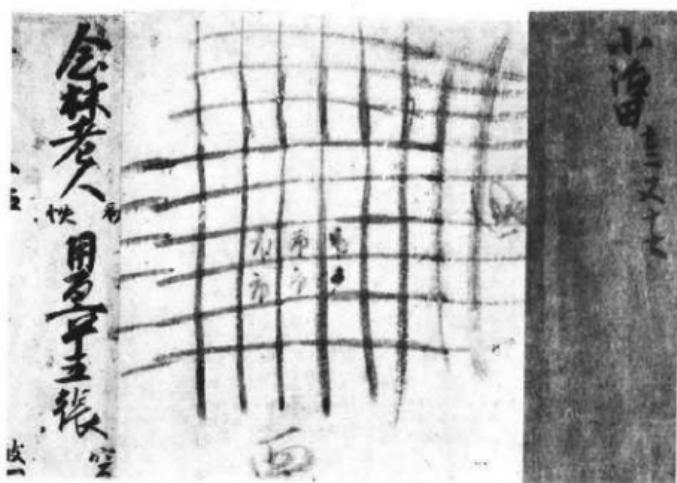


fig. 1 平城京市指圖(京都知恩院所藏「写経所紙筆授受日記」紙背)



fig. 2 東堀河と木橋（西から）

## 序 文

奈良市は今から1200年の昔、わが国の首都平城京として栄え、20万余の人々が住む世界有数の都市でありました。奈良市教育委員会では、この平城京の経済の中心である東市推定地の発掘調査を、昭和56年度以来継続的に実施しております。

平城京東西市は、古代の政府直轄市場として重要なものであることは、ことに知られておりましたが、その範囲と正確な位置については諸説に分かれるところがありました。今回の調査地は、市域推定地の中を南北に貫流する東堀河と八条条間路とが交差する位置にあたります。調査の具体的な内容は、各章に詳述しておりますが、東堀河ではこれに架かる木橋が発見され、多量の土器・瓦などが出土しております。これらの遺構や遺物に、私たちはありし日の平城京の賑いの一端を垣間見ることができますし、かつまた、東市推定地内の様相に新しい知見が加えられました。

開発にともなう事前調査と併なり、水田を借りあげて調査し、終了後はもとの状態にして所有者にお返しするという手順をふむため、大変面倒な調査となってしまいますが、その分成果も期待できるものと思われます。本概報に示した調査成果が、平城京の研究、ひいてはわが国古代史の研究に、いささかなりとも新しい見通しを立てることができれば幸いであると考えております。

調査にあたって数々の御指導をいただいた奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめとする関係各位にあつく御礼申し上げます。また今後一層の御指導をお願いするものであります。

昭和59年3月25日

奈良市教育委員会

教育長 藤井宗治

## 例　　言

1. 本書は、昭和58年度に奈良市東九条町において実施した、平城京東市跡推定地内（左京八条三坊十一坪）の発掘調査の概要報告である。
1. 調査次数、調査期間および調査地地番は下記のとおりである。

58年度 第4次調査 昭和58年4月20日～6月24日（東九条町 441番地-1・2  
立石堅志が担当した。なお、補助員として服部芳人君（奈良大学4回生）が参加した。

1. 調査にあたっては、地元自治会および中嶋米治（東九条町521番地）、中田正弘（同584番地）の両氏から、調査地の提供をはじめ数々の便宜を受けた。記して感謝したい。

1. 本書の作成および挿図の掲載にあたっては、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部、京都知恵院より協力を受けた。記して謝意を表したい。

1. 本書の執筆は下記のとおり分担して行ない、中井 公がこれをとりまとめた。

I・II・III-1：中井 公、III-2・4：立石堅志、III-3：篠原豊一

IV：中井 公、立石堅志

## 目　　次

I はじめに.....	1
II 検出遺構の概要.....	4
III 出土遺物の概要.....	12
1. 瓦類.....	12
2. 土器類.....	14
3. 木簡・木製品.....	24
4. 金属製品・石製品・土製品・錢貨.....	28
IV まとめ.....	31



fig. 3 東堀河の遺存地割（南から）

**調査地** 平城京東市跡推定地の継続調査も今年で3年目、第4次の調査となる。今回の調査もまた、過去3回の調査と同じく、市域推定地北辺部の様相の解明を目的として実施した。調査地は左京八条三坊十一坪の北辺中央、すなわち第2次調査地と第3次調査地とのほぼ中間地点にあたる。この場所は、市域推定地内を北から南へ貫流する「東堀河」と呼ばれる河川の痕跡が水田地割に良好に残されている。調査対象地の水田は、その遺存地割のうちの一筆と、八条三条間路がかかる西隣の一筆であり、双方の交差部分の様相の解明には少なからぬ期待がもたらされた。

**東堀河** ところで、東堀河については、大安寺宮地町付近（左京五条三坊）を北限とし、南は京外の地蔵院川付近に至る南北約3kmにわたり、断続的ながらその痕跡を水田地割にとどめていることが知られている。そのうち発掘調査は、今回の調査をも含めこれまでに4地点で実施されている。すなわち、左京六条三坊十坪、同八条三坊九坪、同八条三坊十一坪（今回の調査）、同九条三坊十坪においてである。<sup>注1)</sup> その結果、東堀河は少なくとも東三坊を六条から九条まで、各坊の九～十二坪のはば中央を南北にまっすぐ貫流していることが、検出遺構によっても裏付けられた。<sup>注2)</sup> このうち左京八条三坊九坪の調査は唯一河道の両岸を確認した調査例で、その規模が幅約10m、深さ1.4mであることが知られた。また、同九条三坊十坪の調査では、九条三条間路との交差部

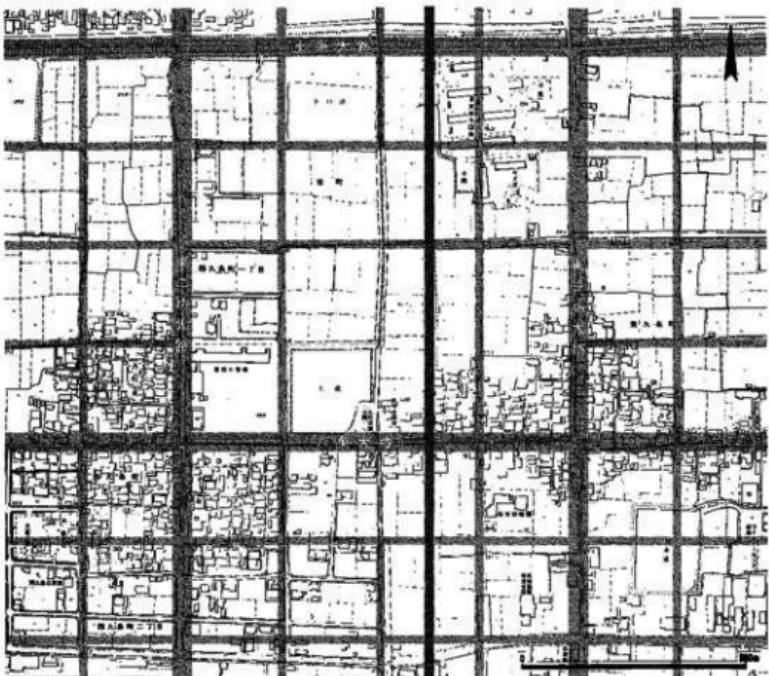


fig. 4 市域推定地周辺の地形と条坊 1/7500(奈良市1978年作製 1/2500「大和都市計画図版25」使用)

に架かる木橋の遺存も確認され、奈良時代の橋を知る上で数少ない貴重な資料を得ている。

**調査の概要** さて、今回の発掘調査は、東堀河と八条条間路との交差部推定位置に約203m<sup>2</sup>の発掘区を設定して行なった。調査期間は、昭和58年4月20日から6月24日までである。その結果市域推定地の北辺を両八条条間路を追認するとともに、東堀河では木橋の遺存を確認し、十一坪の内部でも堀立柱塀3条などを検出することができた。八条条間路については、今回はじめて路面と南北両側溝とを一括して確認し、從来机上で算出していた幅員などが明らかになった。また、東堀河に架けられていた木橋は、少なくとも3回にわたって架替えられたものが重複して遺存していた。しかも、これらは、橋脚と溝内堆積土の層位との関係から、8世紀中頃から9世紀末頃にかけての変遷を明確にとらえることができる稀有な状態であった。

注1) 奈良市教育委員会「平城京左京六条三坊十坪(東堀河)の調査」(『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』所収) 1984

注2) 奈良国立文化財研究所編『平城京左京八条三坊発掘調査報告書-東市周辺東北地域の調査』1976

注3) 奈良国立文化財研究所編『平城京東堀河-左京九条三坊の発掘調査』1983

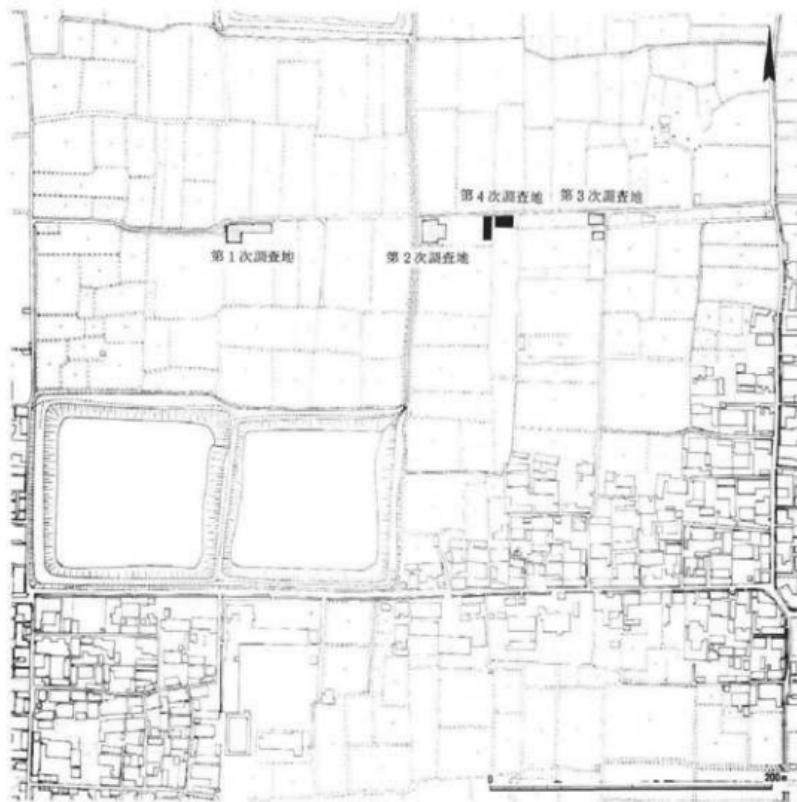


fig. 5 発掘区位置図 1/4000(奈良国立文化財研究所1963年作製 1/1000「東市」使用)

#### 第4次調査日誌抄

- 4月20日 発掘区（203m<sup>2</sup>）設定。木田耕士、床土の鉢除を開始。  
 5月10日 並木橋出を開始。八条全皿路側溝などの残存を確認。  
 5月11日 奈良市発掘調査測量用基準点により国土方観測点設定。  
 5月14日 東駄河上層の発掘を開始。木板の遺存が明らかになる。  
 5月18日 上層を完削し中層に移る。木板の時割れの重複を確認。  
 5月19日 福山義男先生、文化庁主任調査官・河原林之氏視察。  
 5月25日 1回目の写真撮影。奈良女子大学考古学実習見習場学習。  
 6月1日 2回目の写真撮影。実測用造り方を設定。実測作業にはいる。奈文研・坪井清足所長、岡田貴男部長視察。  
 6月4日 地元住民と関係者に調査の状況を説明。参加者50人余。  
 6月8日 実測圖の作成に一段落がつく。記者発表を行なう。  
 6月9日 下層の発掘開始。補足調査しつつ横断の取上げも開始。  
 6月22日 最終の補足実測等の後、3回目の写真撮影を行なう。  
 6月24日 調査の全疗程を終了。砂入れ蓋の後埋戻しにはいる。



fig. 6 調査風景

## II 検出遺構の概要

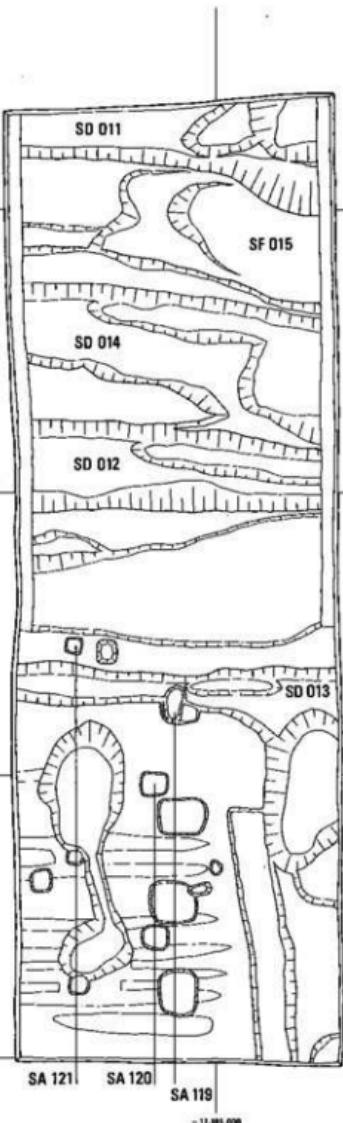
発掘区内の土層は、水田耕土と床土の下、灰褐色粘土と茶褐色粘土の堆積があり、地表下約60~80cmで黄褐色粘土の地山となる。遺構検出面はこの地山上面である。

東堀河 S D017 素掘りの南北溝で、東岸から幅10mまでを確認したが、西岸が発掘区外であるため正確な幅員は明らかでない。恐らくは11~12mほどになるであろう。深さは東岸の端から約1.6mを測る。しかし、岸は大きく侵蝕され、後述の八条条間路の路面よりも0.4mほど低くなっている。当初は2m内外の深さであったと考えられる。発掘区内での溝底は、標高54.6~54.8mである。これは、上流で調査した八条三坊九坪での溝底よりも0.4mほど低く、下流の九条条間路との交差部での底面よりは1.2mほど高い。溝内の埋土は灰色系の砂と粘土とが互層になった堆積で、大きくは上・中・下の3層に分けることができる。各層の出土遺物からみて、下層は8世紀の後半から末頃にかけて、中層は9世紀の前半に、上層は9世紀の終わり頃までに堆積したことがわかる。9世紀にはいると路流としての機能を次第に失ない、終わり頃にはほぼ埋没したようである。なお、溝内から出土した遺物は莫大な量である。内訳は、土器をはじめ、瓦、木製品、金属製品、錢貨、石製品など、種類豊富で多岐にわたっている。

八条条間路 S F015 八条条間路は、今回はじめて路面と南北両側溝とを一括して検出した。削平のため路面上の整地土などの有無は確認できず、検出面は地山の上面である。路面幅は4.4~4.8mで、側溝間の心々距離は北側溝北岸が未検出ではあるが、6m内外に落着くであろう。なお、路面上面は東堀河の侵蝕のため東側に向って下降している。

同北側溝 S D011 素掘りの溝で、北岸が未検出のため全幅は不明だが、1m幅までを確認した。深さ約25cmで、東堀河との合流部近くでは溝底が抉られて倍ほどの深さとなる。

若干の土器片、瓦片とともに溝底近くからは鏡益神寶(859年初鑄)が出土している。



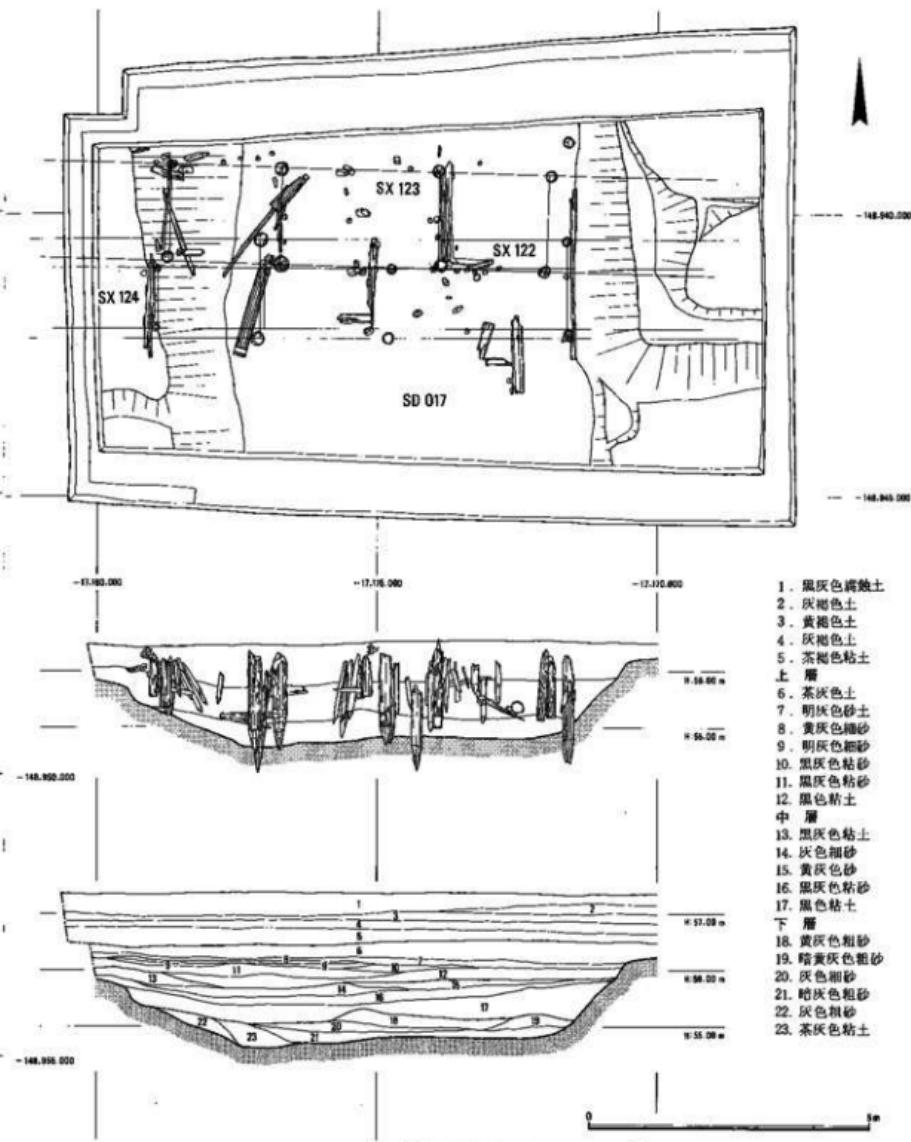


fig. 7 檢出構造平面図・立面図 1 / 100

**同南側溝 S D012** 幅1.5～1.6m、深さ約20cmの素掘り溝で、東堀河との合流部近くではやはり溝底が深く抉られている。出土遺物は少なく、わずかな土器片、瓦片があるにすぎない。

**東西溝 S D013** 条間路南側溝の南側で、これに平行する幅0.5～0.8m、深さ約20cmの素掘り溝。南側溝とは心々間の距離で約3.9mの位置にある。小量ながら土器片、瓦片が出土した。

**東西溝 S D014** 条間路の路面中央を走る幅1.5～1.8m、深さ約20cmの素掘り溝。奈良時代の遺物が出土したが、溝自体は東堀河埋土上でも確認でき、これの廃絶後に掘削されたことがわかる。

**木橋 S X122** 後の抜取りで原位置を保つ橋脚が少なく、全体の復原は難しい。しかし、桁行梁行ともに柱筋を備えた4本の橋脚からは、梁行1間(1.8m)で、橋の中心軸を条間路の路面心に合わせて架けられていたことが知られる。また、西側2本の橋脚が径約25cmであるのに対し、東側の2本は同約15cmと細く、この2本については補助橋脚である公算が高い。橋脚は先端を削り尖らせて河底に打込んでいるが、層位的に橋の構築時期は下層堆積中(8世紀後半～末頃)であるとみられる。加えて、下層上面には位置的にこの橋のものと思われる橋板の転落があり、下層堆積の終末(8世紀末頃)には廃絶したと堆察できる。

**木橋 S X123** 削平のため岸上で桁尻を受ける柱穴を欠くが、残存する8本の橋脚からは梁行1間、桁行5間の規模に復原できる。橋脚間の寸法は梁行が1.8m、桁行は中の間が広く2.8mで、その両側は各2.0mである。橋脚は中央の4本が径20～26cmで、両側の補助橋脚は同16～18cmとひとまわり細い。その据え付け方は、中央4本のうち西の2本は先端を尖らせ打込む方法によるが、残る6本については先端が平坦であり、鉤形を掘って埋込まれたものようである。また、東側の補助橋脚間に除く各橋脚間にねぎが転落して残存したが、腐蝕が著しくまったく原形をとどめない。構築の時期は、層位的に中層の堆積中(9世紀前半)にあてることができる。加えて、梁が上層の下部に転落している状況からは、少なくとも9世紀中頃までには廃絶したものと堆察できる。なお、橋の中心軸は条間路路面心の北側にずれ、軸線自体も方眼方位東に対して南偏する。

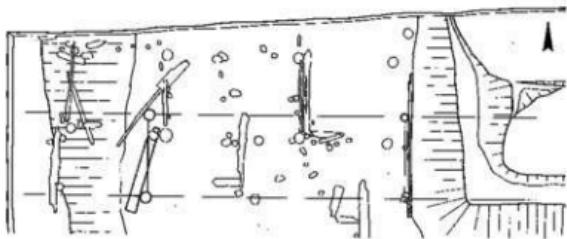
**木橋 S X124** 東半分が残存せず全体の規模は不明だが、梁行1間で、西岸近くから桁行2間分の橋脚が遺存する。橋脚間の寸法は、梁行が1.1mと狭く、桁行は西から2.0～1.8mと不揃いである。いずれの橋脚も径14～16cmと細く、鉤形を掘って据付けられたらしく、先端は平坦である。また、橋脚間に上端に梁が残存した。腐蝕のために原形をとどめないが、長さ1.6～1.8mを残しており、梁間寸法よりも随分と長い。構築の時期は、層位的にみて上層の堆積中(9世紀中頃～後半)である公算が強く、堀河の埋没(9世紀末頃)直前までの最後の木橋となる。なお、橋の中心軸は条間路路面心から若干南へずれはするが、軸線自体はほぼ方眼方位と一致する。

**獨立柱塙 S A119** 東堀河西岸の南北塙。3間分(北から1.8～1.6～1.6m)を検出し、南へ続く。

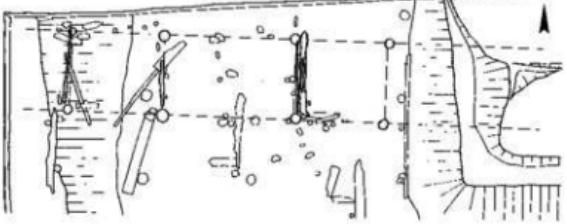
**獨立柱塙 S A120** S A119西側の南北塙。1間分(2.7m)を検出し、さらに南へ続く。

**獨立柱塙 S A121** S A120西側の南北塙。後世の削平で1柱穴を欠くが、3間分に復原できさらに南へ続く。柱間寸法は北から2間分が3.8m、次の1間が2.2mである。

SX 122



SX 123



SX 124

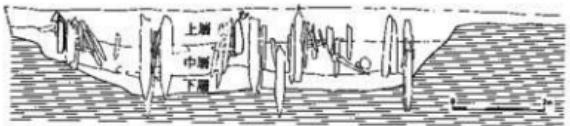
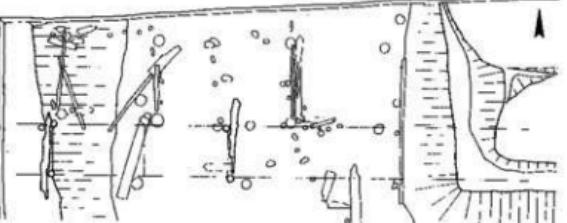


fig. 8 木橋の変遷



fig. 9 S F015 (北から)

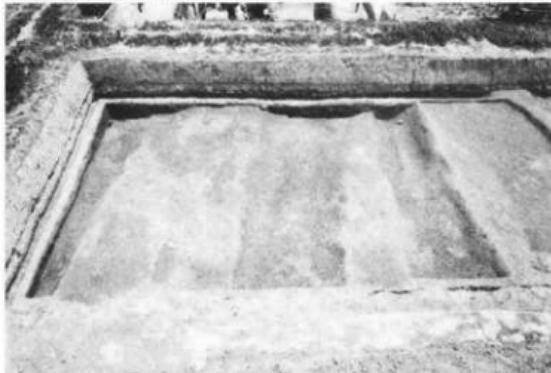


fig. 10 S F015 (西から)

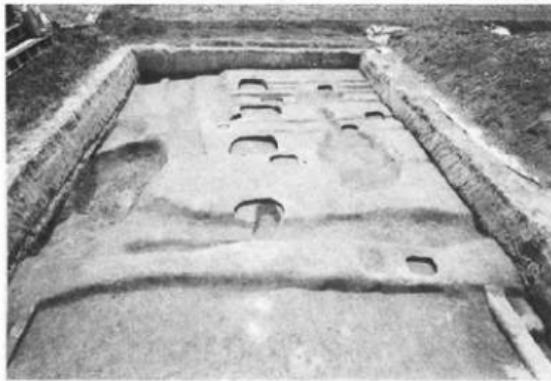


fig. 11 S A119, 120,  
121 (北から)



fig. 12 SD017、SX122、123、124全景（東から）



fig. 13 SD017完築時全景（東から）



fig. 14 S X 123細部  
(北西から)



fig. 15 S X 123細部  
(北東から)



fig. 16 S X 123細部  
(西から)



fig. 17 SX124細部

(南西から)



fig. 18 SX122細部

(南西から)



fig. 19 SX122細部

(西から)

### III 出土遺物の概要

#### 1. 瓦類

瓦類は整理箱にして約40箱分がある。大部分は東堀河S D017から出土したものであるが、八条条間路側溝S D011・012からも若干量の出土があった。種別内訳は、通常の丸瓦・平瓦が大多数を占め、軒瓦には軒丸瓦18点と、軒平瓦10点とがある。

軒丸瓦 9型式に分類できる。1は三重圓文軒丸瓦で、中心に珠点をおくもの。平城宮6012A型式軒丸瓦と同范で、同軒瓦編年のⅡ期（養老5年～天平17年）に位置づけられる。2点出土。2は単弁8弁蓮華文軒丸瓦。弁は幅広で、弁間に横形の間弁をおく。中房は窪み、蓮子の配置は1+4。外区には大振りな線鋸齒文がめぐる。平城宮6127A型式軒丸瓦と同范である。1点出土。3は単弁12弁蓮華文軒丸瓦。弁端がわずかに尖り気味で、間弁は短かく横形を呈す。中房には1+5の蓮子をおき、外区内縁には珠文、外縁には線鋸齒文がめぐる。平城宮6138C型式軒丸瓦と同范であるが、瓦筋はかなり磨耗している。2点出土。4は複弁8弁蓮華文軒丸瓦。間弁は独立し、中房には1+6の蓮子をおき。外区内縁には珠文、外縁には線鋸齒文がめぐり、両者とも各弁の中軸線上に規則性をもって割付けられる。平城宮6308B型式軒丸瓦と同范で、同軒瓦編年のⅡ期に属す。1点出土。5も複弁8弁蓮華文軒丸瓦であるが、間弁がなく各蓮弁の接続しあうのが特徴である。わずかに突出した中房には1+8の蓮子を配し、外区は内縁に珠文、外縁に細かな線鋸齒文がめぐる。平城宮6316型式の軒丸瓦に属するが、同范品の知られない新種である。1点出土。6も複弁8弁蓮華文軒丸瓦。独立した間弁をもち、突出した中房には1+6の蓮子をおき。外区内縁は珠文帯、外縁は素縁である。3点出土。7は7世紀前半の素弁10弁蓮華文軒丸瓦。弁中央にわずかに稜がつき、弁端には横形の切込みをもつ。中房は小さく、蓮子の配置は1+5。外区は素縁である。1点出土。8は7世紀後半の複弁6弁蓮華文軒丸瓦。全体に彫りが深く、蓮弁の表現は肉厚で力強い。中房は大きく1+6+12の蓮子をおき、外区には大振りな面鋸齒文がめぐる。6点出土。そのほか、小片で種別不明だが、平城宮6282型式の軒丸瓦1点がある。

軒平瓦 4型式に分類できる。9は3回反転の均整唐草文軒平瓦。中心飾りには、上方に聞く中心葉内に基輪二条で垂下される花頭を飾る。外区に線鋸齒文がめぐるのは特徴的である。1点出土。10はいわゆる「興福寺式」の3回反転均整唐草文軒平瓦。中心飾りが下方に開き、唐草は主葉だけが巻込む特徴をもつ。外区は、上外区が円珠文、脇区が梢円珠文、下外区が線鋸齒文とそれぞれに異なる。平城宮6671E型式軒平瓦と同范である。5点出土。11は5回反転の均整唐草文軒平瓦。牛頭状の中心飾りをもち、唐草は連続して派生しつつ反転する。外区は珠文帯。平城宮6712A型式軒平瓦と同范で、大安寺では前述の同6138C型式軒丸瓦との組合せが知られ、ともに「大安寺式」と呼称される。2点出土。そのほか、重弧文軒平瓦の小片2点が出土している。

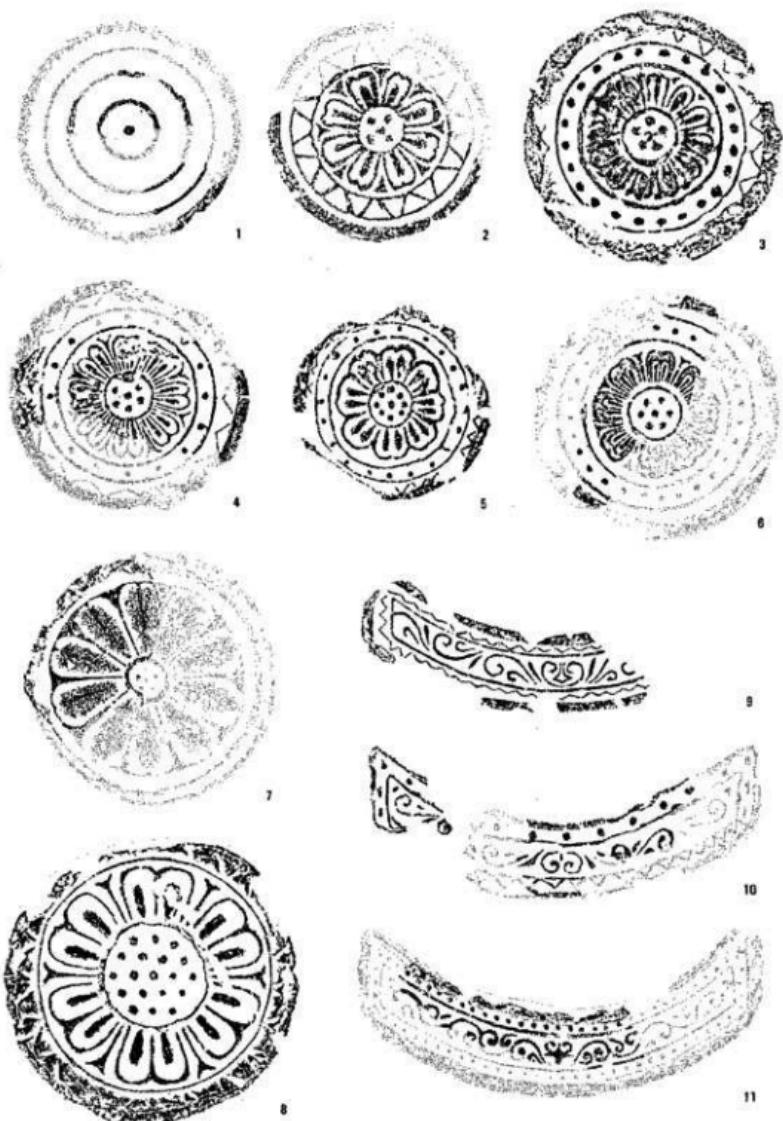


fig. 20 轩 瓦

## 2. 土器類

今回の調査では、整理箱約100箱分の土器類が出土したが、その大部分は東堀河 S D 017から出土したものである。ここでは、このS D 017から出土した土器について図示し、記述する。S D 017の堆積層は先述のように、概ね上層・中層・下層の三層に大別でき、各層から出土する土器には明確な時期差がみられる。出土土器の年代は、下層出土の土器が8世紀中頃から後半、中層出土の土器が8世紀末から9世紀初頭、上層出土の土器が9世紀後半を主とする時期に比定できる。なお、出土土器の記載は、各層に特徴的なものにとどめる。

### 下層出土土器 (fig. 21・22)

土師器には、杯A (3・4・12)、杯B (2)、蓋X (1)、椀A (15・18・19)、椀C (16・17・20)、皿A (11・13・14)、皿C (5~10)、高杯、壺A (31)、壺B (22~24・27)、壺X (21)、壺A (28~30)、壺B (26)、瓶、甕 (25)、製塙工具等がある。杯Aはいずれも内面に一段の斜放射状暗文を施す。杯B (2)は、内面をよこなで調整し、一段の斜放射状暗文を施したのち、ラセン状暗文を施す。蓋X (1)は、笠形になだらかに彎曲する体部と、やや下方に折れる端部からなり、環状のつまみを貼付け、外面全周を5分割するへら磨きを施す。佐波理器蓋を模したものであろう。皿Aには、外面調整を、口縁部よこなで、以下をへら削りする *b* 手法を用いるもの (11) と、外面全面をへら削りする *c* 手法を用いるもの (13・14) がある。皿Cはいずれも内面をよこなで、外面口縁部をよこなで、以下無調整とする *e* 手法で調整。椀Aは、内面よこなで調整。外面を *b* 手法とするもの (15) と、口縁部よこなで、以下無調整で、外面全体へら磨きを施す *aa* 手法とするもの (18・19) がある。椀Cは、いずれも内面よこなで、外面 *e* 手法とする。壺X (21) は、口径3.4cm、器高5.3cmを測る小型の壺で、体部中位に外から内への穿孔がなされる。壺A (31) は、胴部外面全周に12分割するへら磨きを施す。壺Bは、大きさにより、口径14cm程度、器高9cm程度のもの (24・27) と、口径9cm程度、器高6cm程度の小型壺 (22・23) に分類できる。壺 (25) は、截頭砲弾形の円頭の上部を団う形で胴を貼付け下部をへらで切り取り、焚口とする。外面は縱方向のハケメ調整。焚口・肩に煤が付着する。

須恵器には、杯A (33)、杯B (32)、杯L (34)、杯B 蓋 (35~38)、皿C (39・40)、壺A (45)、壺A 蓋 (44)、壺E (47)、壺G (50)、壺K (52)、壺L (46)、壺M (42)、壺N (51)、壺Q (43)、鉢D (47)、水瓶、平瓶 (49)、壺A (48)、壺B、盤等がある。杯L (34) は、佐波理器を模したもので、体部が内彎ぎみに立ちあがり、口縁部で強く外反する。壺M (42) は、肩の張る胴部に直立する頸部を付す。端部付近で強く外反し、端部凹状を呈す。底部へら切りとし、断面台形の高台を貼付ける。壺G (50) は底部糸切り。壺A (48) は、卵形の体部に外反する短い口縁部を付すもので、内外面に叩き板による成形痕が残る。

※ 土器の器種名および調整手法は、奈良國立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅷ・Ⅹ』に準拠した。

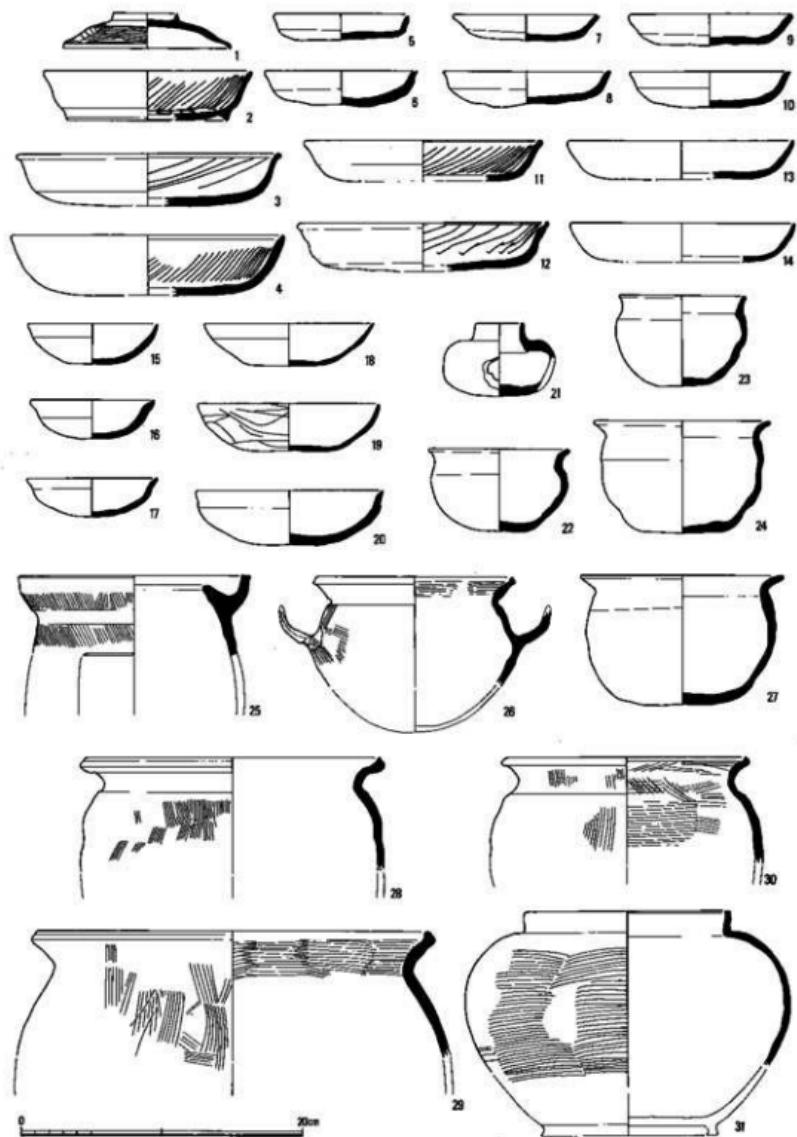


fig. 21 下層出土器 1 / 4

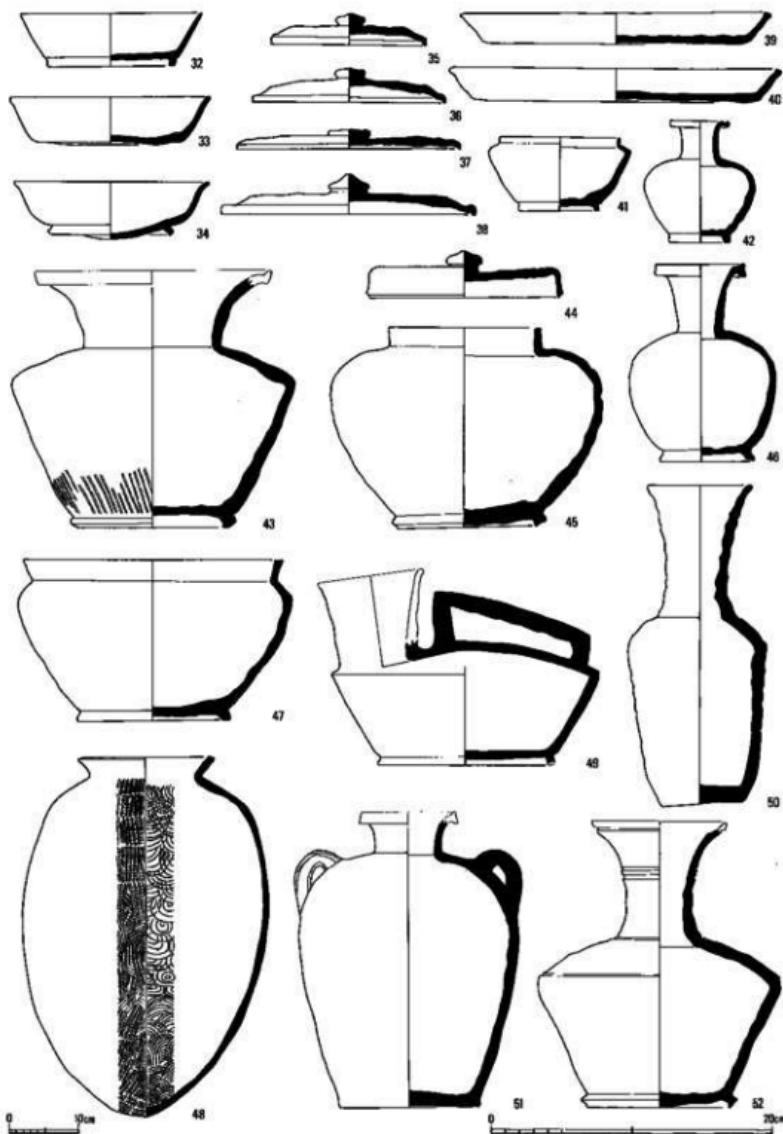


fig. 22 下層出土土器2 1/4 (48のみ1/8)

中層出土土器 (fig. 23)

土師器には、杯A (53~55)、椀A (59)、椀C (60)、椀X (62)、皿A (57・58)、皿C (56)、高杯、壺B (61)、製塙土器等がある。杯Aのうち53・55は、内面をよこなで、外面をe手法で調整する。54は、内面をよこなで、外面をa<sub>3</sub>手法で調整する。椀A (59)は、内彌する体部を呈し、口縁部をやや内側へつまみ出す。内面をよこなで、外面をc<sub>0</sub>手法で調整する。椀C (60)は、内面をよこなで、外面をe手法で調整する。皿A (57・58)は、口縁部上半で外反し、端部を上方へつまみあげる。内面をよこなで、外面をc<sub>0</sub>手法で調整する。椀X (62)は尖底を呈し、底部から口縁部にかけて斜め上方に立ちあがる体部をもち、口縁端部をやや外方へ肥厚させおさめる。内面及び口縁部外面をよこなで、以下を無調整とする。

須恵器には、杯、皿C (63)、壺L (69)、壺M (65~68)、壺Q (64) 等がある。杯・皿類の出土は極めて少ない。皿C (63)は、口径19.2cm、器高1.9cmを測る。内面・体部外面を回転ナデ、底部内面をナデで仕上げる。底部外向は回転ヘラ削りとする。壺Mは、底部の形態によって高台を付するもの壺Ma (66)、高台状の段稜を呈するもの壺Mb (67)、高台を付さないもの壺Mc (65・68)に分類できる。いずれも底部は糸切り。なお、壺Mbは口縁上部で外反、端部を上方へひきあげる。壺Ma・Mcはいずれも口縁部外反、端部を丸くおさめる。

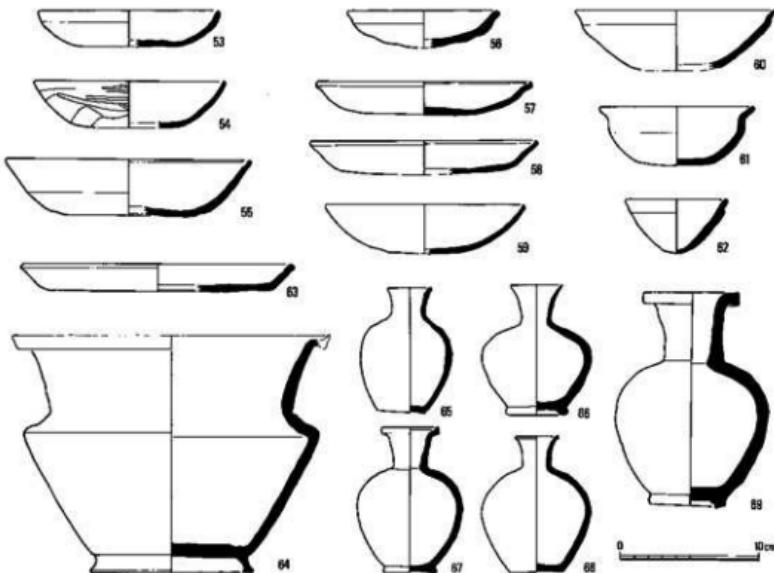


fig. 23 中層出土土器 1/4

### 上層出土土器 (fig. 24)

土器には、杯A (70~72)、杯B (81)、碗A (79)、皿A (73~78)、皿B (80)、高杯、甕A (82・83) 等がある。杯Aはすべて、内面をよこなで、外面を $c\theta$ 手法で調整する。底部内面をハケメ調整するものも見られる。杯Bには、口径21cm、器高5.7cmを測るもの (81) と、口径16.6cm、器高5.7cmを測るもの (fig. 27-1) がある。81は内面をよこなで、外面全体をへら削りした後に高台を貼付け、よこなでして仕上げる。後者は、内面をよこなで、外面全体を $e$ 手法で調整する。底部は高台を貼付け、よこなでして仕上げる。皿Aは、大きさにより、皿A I (76・78; 口径17cm程度、器高2cm程度) と、皿A II (73~75・77; 口径15cm程度、器高2cm程度) に分類できる。皿A I はいずれも、口縁端部を内側に丸く肥厚させ、内面をよこなで、外面を $c\theta$ 手法で調整する。皿A II はいずれも、口縁部上半で外反し、口縁端部を上方へひきあげる。内面はよこなで調整。外面は $e$ 手法で調整するものが多数を占めるが、若干 $c\theta$ 手法を用いるものも見られる。皿A I・IIともに、底部内面をハケメ調整する例がある。皿B (80) は、内面をよこなで調整。外面全体をへら磨きする。へら磨きは、底部外面、高台内にも施される。

須恵器には、杯A (86)、杯B、杯蓋 (85)、壺A (98)、壺H (90・91)、壺M (92~97) 等がある。杯蓋 (85) は、頂部の宝珠つまみがなく、なだらかに彎曲する体部と、下方へひき出される端部からなり、外面を回転ヘラ削りする。壺Mは完形品だけて36点を数え、そのほとんどが木橋S X 124の橋脚付近からまとめて出土した。底部の形態によって、高台状の段稜をもつもの壺Mb (92~94・97)、平底で高台を付さないもの壺Mc (95・96) に分類できる。匕唇においては、高台を付すものの壺Maはみられない。いずれも底部に糸切り痕を残す。なお壺Mbに、口縁部が上半で外反し、端部を上方へひきだすもの (92・93) と、外反しつつ立ちあがり、端部を丸くおさめるもの (94) がある。若干数、端部が断面三角形を呈すもの (97) も見られる。壺Mcでは、外反し端部を丸くおさめる例が多数を占める。

なお、上層出土土器には土器、須恵器の他に、黒色土器、鉛釉陶器がある。黒色土器には、杯A (87・88)、杯B、甕A (89) 等がある。杯A・B、甕Aとともに炭素を内面に吸着させる黒色土器A類である。いずれも炭素吸着面が外面口縁部まで及ぶ。杯Aはいずれも内面をよこなで、外面を口縁部よこなで、以下をへら削りとしたのちに、内外面ともにへら磨きを施す。87は、口径15.2cm、器高3.9cmを測る。内外面にへら磨きを施したのち、内面にラセン状暗文、底部中央に連結輪状暗文を施す。88は口径17.6cm、器高4.8cmを測る。87に比し器壁が薄く、外面のへら磨きが粗雑である。甕Aは口径10cm、器高8.5cmを測る小型のもので、球形の胴部と、外方へ広がる口縁部を呈する。外面はへら削りの後、口縁部外面をよこなで調整する。内面はへら磨きを施し、炭素を吸着させ黒色化する。鉛釉陶器には、綠釉陶器壺 (84) 1点がある。胎土は軟質で、灰白色を呈す。内彎しながら立ちあがる体部と、やや外反し丸くおさめる口縁端部からなる。高台は底部外面を円板状に削り出した切り高台で、底部をへら削りで調整する。

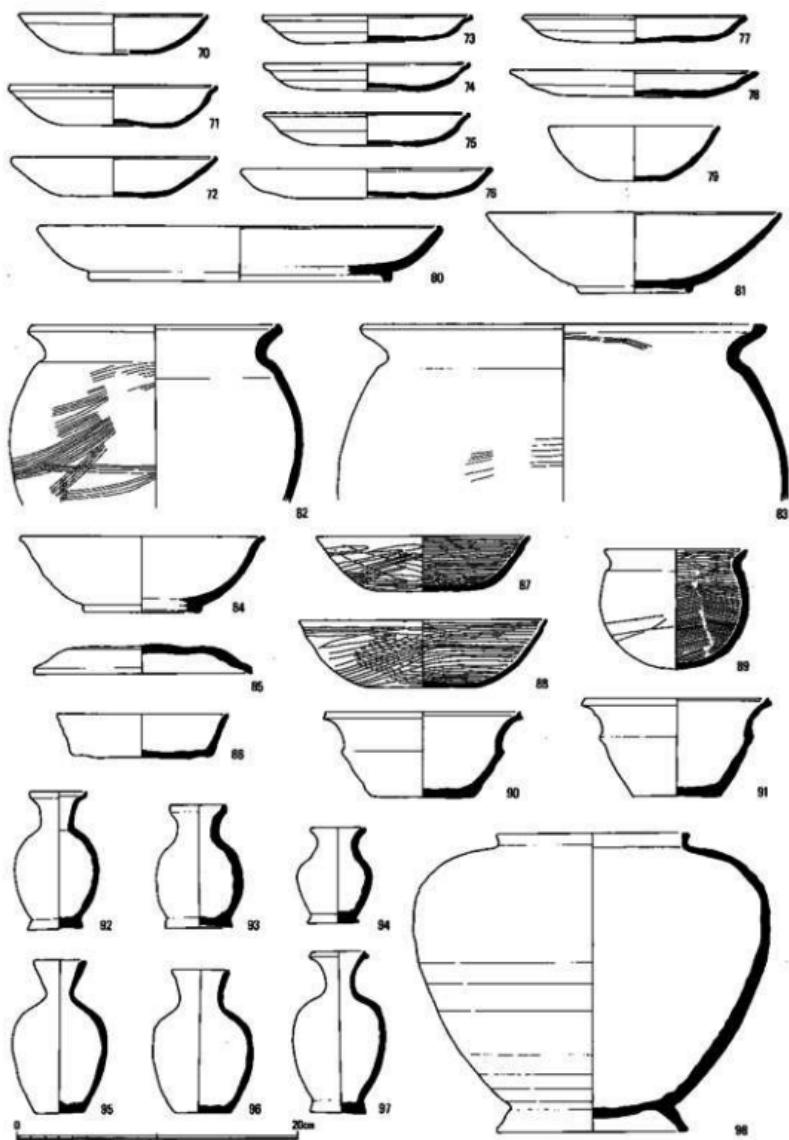


fig. 24 上層出土器 1 / 4



fig. 25 下脇出土の土器



fig. 26 上脇出土の土器

墨書土器 (fig. 27, tab. 1)

土師器、須恵器の中には墨書の残るもののが40点ある。うち、解説可能なものは24点である。記載内容は別表に示すとおりで、番号は実測図および写真と一致する。

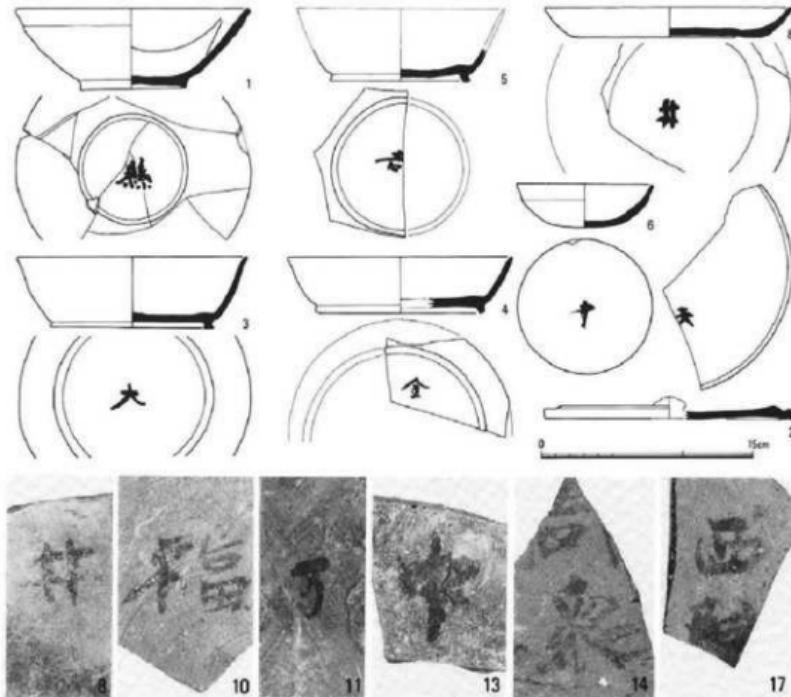


fig. 27 墨書土器 (実測図1/4、写真1/1)

記載内容	器種	記載位置	出土遺構	記載内容	器種	記載位置	出土遺構
1 縦	土師器 杯B	底部外面	SD 017 上層	13 中	須恵器 不明	外面	SD 017 下層
2 夫	須恵器 杯B蓋	頂部上面	"	14 □衆	"	"	"
3 大	" 杯B	底部外面	SD 017 下層	15 □	"	"	"
4 金	" "	"	"	16 万	"	"	"
5 吉	" "	"	"	17 西□	"	"	"
6 寺	土師器 楠A	"	"	18 □	土師器	"	"
7 寺	" "	"	"	19 寺	"	"	"
8 井	" ▨A	"	"	20 井	"	"	"
9 右	" "	"	"	21 ○(記号)	"	"	"
10 福	須恵器 杯B	"	"	22 十(記号)	須恵器	"	"
11 万	" 杯B蓋	頂部上面	"	23 大	土師器	"	SD 017 中層
12 □	"	"	"	24 □□	"	"	"

tab. 1 墨書土器一覧

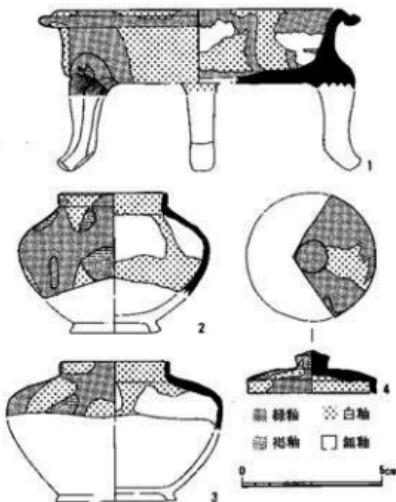


fig. 28 三彩陶器 1／2

### 三彩陶器 (fig. 28)

下層から、小型火舍、小壺、小壺蓋が出土した。小型火舍（1）は、復原器径11.5cmで、残存高3.5cmである。平底で、体部はほぼ垂直に立ちあがる。口縁部は外反、斜め下方へ折れ端部を水平にひきだし丸くおさめる。底部に面取りした脚がつく。脚部は付根部が残るのみでその形態は不明であるが、獸足を模すものと推定される。また、脚数については、現存部からは断定し得ないが、三脚、もしくは四脚のものであろう。胎土は軟質で卵白色を呈す。施釉は残存部から見て、全周を12等分して6区に緑釉をかけ、残り6区を白釉で埋めたようである。脚付根部に褐釉がかかる。底部外面・内面ともに白釉。緑釉は銀化が著しく、黒緑色を呈す。同型のものは、大安寺に類例がある。<sup>(注)</sup> 小壺（2・3）は、ともに口径4cmの薬壺形に復原できる。3は、やや肩が張る。2・3ともに胎土は軟質で、卵白色を呈す。いずれも、体部外面の全周を8等分し、4区に緑釉をかけ、残りの4区を交互に白釉・褐釉で埋める。釉は、頸部内面にもかけられ、白釉が、体部内面に流下している。小壺蓋（4）は、復原径4.7cmで、器高1.6cmである。宝珠形のつまみをもち、縁部をやや外反させ、端部を尖り気味におさめる。胎土は軟質で卵白色を呈す。外面を緑釉・褐釉・白釉でかけわける。内面は白釉のみがかかる。なお、そのほかに中層から火舍片が一点出土している。

注) 奈良県教育委員会「史跡大安寺跡境内発掘調査概報77-3次調査」1977

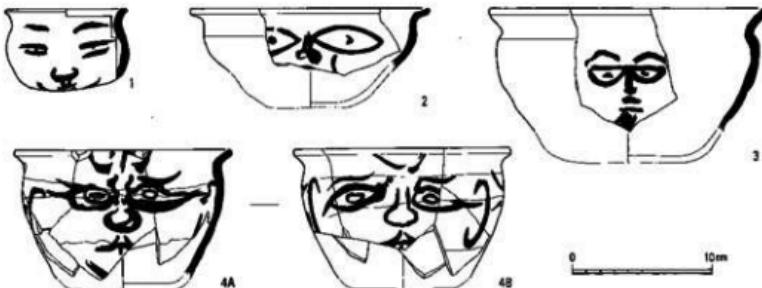


fig. 29 人面墨書き土器 1／4

### 人面墨書き器 (fig. 29)

総数62点があるが、うち完形品、人面の様相が知れるものは、わずかに4点で、大半が小片である。1は、口径8.6cm、器高2.9cmを測る小型壺で、その一面に眉、目、鼻、口、髭、及び頬の輪郭を簡略化し線描するものである。2～4は、いわゆる「人面墨書き土器」に人面を墨書きしたものである。4は体部外面の表裏する2面に人面を描くもので、いずれの面にも眉、目、鼻、口、耳、髭、髪を線描する。体部に成形時の粘土紐巻上げ痕跡をとどめている。2は器形がやや偏平であり、顔の造作も省略して描かれている。

### 土馬 (fig. 30)

総数47点があるが、いずれも各部を欠いており、完形のものはない。比較的残存状態のよいものについて図示する。1・3は、顔面部を欠いているが、体長15cm、高さ14cm程度になるものであろう。2は、顔面部を残しており、体長20cm、高さ15cm程度に復原され、やや人型である。1～3はいずれも粘土を折りまげて断面U字形の彎曲した体部をつくり、胸部の一部を凹ませ棒状の脚をつけるものである。尾部は斜め上方へ引き伸ばす。背中には指印えで鞍の表現がある。2の顔面部は耳をつけたのちに粘土を貼付け、三日月状につくり、竹管文により眼を表現する。耳は幅広で長く、手綱状となる。6・7の頭部も同様の手法で作られるが、顔面部貼付後、頭部先端を上から押してV字形にする。顔面の造作は、同様に竹管で眼のみが表現される。鼻孔は省略されている。4・5は、1～3に比して小型化したもので、体長13cm、高さ11cm程度になると思われる。顔面部は残存しない。頭部・脚部とも短くつくられ、尾部も太めで短くひきあげられる。

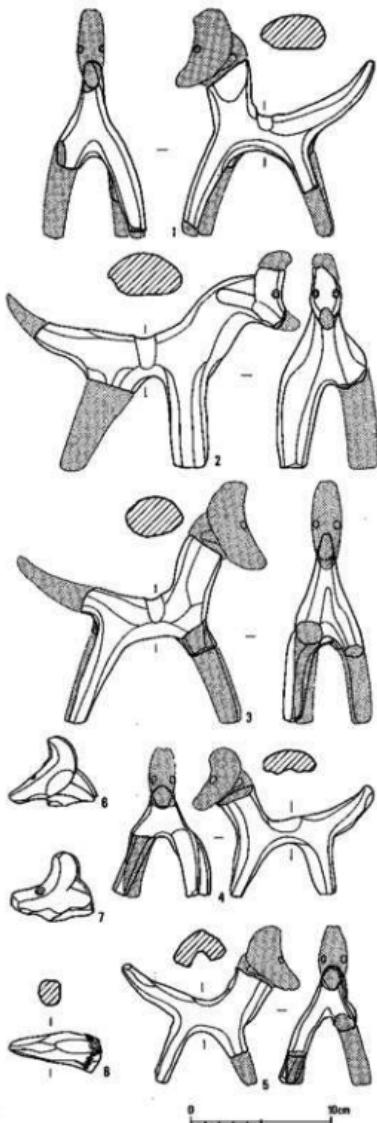


fig. 30 土馬 1/4 (アミ部分は復原)

### 3. 木簡、木製品

東堀河S D017中層下部の黒色粘土からは、木製の遺物も出土している。内訳は、木簡、祭祀具、服飾具、工具、容器および用途不明品である。これらは、溝内堆積土の状態からみて、8世紀末頃から9世紀初め頃にかけて投棄されたものと考えられる。以下に主なものの説明をする。

**木簡 (fig. 31)** 6点が出土した。うち原形を保つのは1点だけで、残りは断片である。内訳は、文書と思われるもの2点、付札と思われるもの2点、不明2点である。以下に、釈文、法量等を記しておく。(なお、釈文右側の数字は、長さ、幅、厚みをmm単位で示し、欠損部分については( )で示した。付号および型態分類は、奈良国立文化財研究所「平城宮木簡三」に掲った。)

1 □□九□□知 <sup>(表か)</sup> □□冊 (182) × (16) × 5 081

下端および右側は欠損。文書の断片か。

2 一斗六升 (204) × (24) × 6 081

上端と右側はほぼ原形をとどめ、右側下端近くには2箇所にV字状の切欠きがある。食品類の容量を記した付札であろうか。

3 • □ □ <sup>(表か)</sup> □ (153) × (18) × 4 081  
・飯口食飯口

上端および左側は欠損。食膳に関する文書の一部であろうか。

4 阿貴水 <sup>。倉垣少連</sup> 六月四日 112 × 26 × 3 081

完形の付札で、上下両端に切欠きをもつ。「阿貴水」は意味不明。「倉垣」は氏名、「少連」は人名であろうか。

5 大坂□ (99) × (18) × 3 081  
□

上下両端および右側は欠損。

6 万呂 □□乙 (78) × (12) × 2 081

上下両端および左側は焼損。「万呂」は人名を記したものか。

**祭祀具 (fig. 31)** 削掛け1点と、人形6点がある。削掛け(7)は、短冊状の柾目薄板の上端を三角形にかたどり、その両端に斜下りの切込みを入れ、下端をV字状に尖らしたもの。長さ15.6cm、幅2.4cm、厚さ0.2cm。人形(8~13)は短冊状の薄板に切込みを入れ、人の全身を正面からかたどったもので、表裏にはいずれも割裂きの痕跡が残る。8は板目材で頭部を半円形に削るが、頂部は折られている。下半は欠損する。顔面には、細い線で目、鼻、口が墨書きされる。残存長10.3cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm。9は板目材で、頭部は斜上りの切込みを両端に入れて上端を折っている。右足下半と左足を欠損するが、逆U字状の股をもつものになろう。顔面全体に太い線で眉、目、鼻、口を墨書きし、また腹部にも太い線で意味不明の墨書きがみられる。

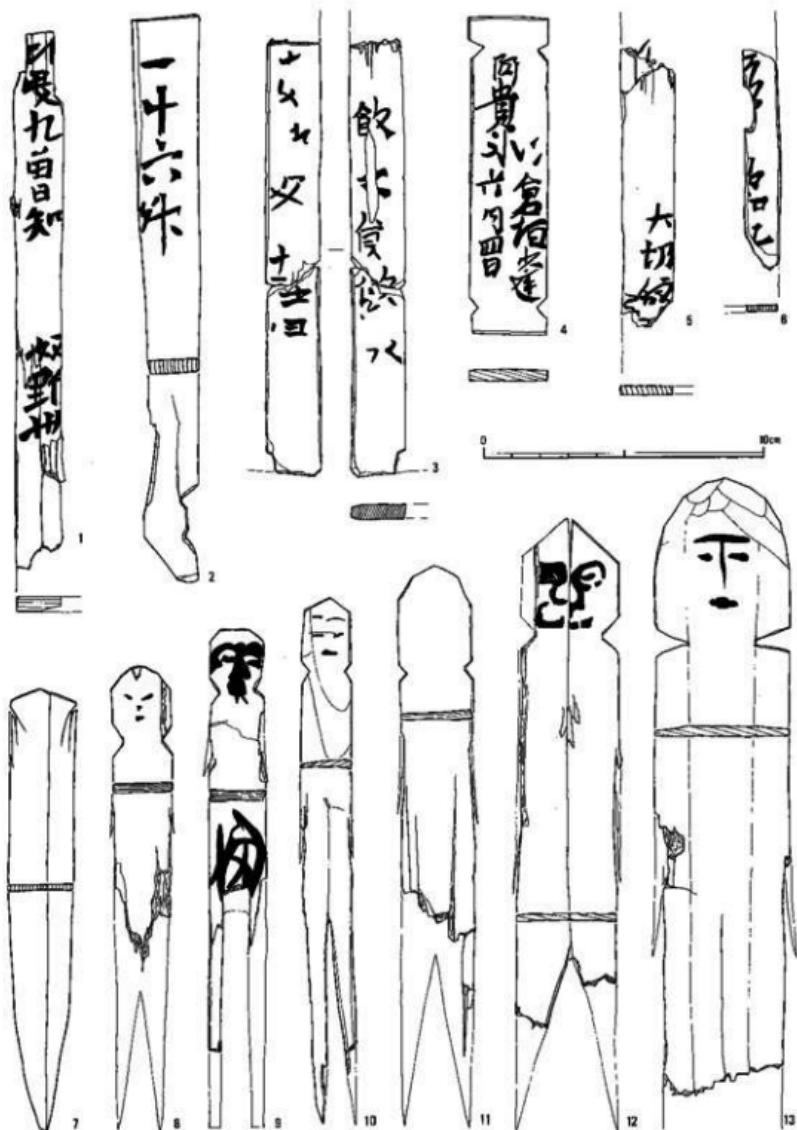


fig. 31 木 館、木製品(1) 1 / 2

残存長15.0cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm。10は柾目材で、頭部を三角形にかたどったもの。両足が残り、股は逆V字状に表現される。顔面はていねいに削られ、細い線で眉、目、口が墨描きされる。長さ18.7cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm。11は板目材で、頭部を半円形にかたどったもの。下半は欠損する。顔面には墨書きがない。残存長17.5cm、幅2.5cm、厚さ0.4cm。12は板目材で、頭部を三角形にかたどったもの。脚部には、逆V字状の股をもつ。顔面には、太い線で目、鼻、口が墨描きされる。残存長18.0cm、幅3.5cm、厚さ0.3cm。13は他にくらべて大型品であるが、下半を欠損する。板目材で、頭部は半円形にかたどり、周縁をていねいに削る。首部の切れ目は他のものにくらべて鋭く深い。顔面中央には眉、目、鼻、口が墨描きされる。残存長21.8cm、幅4.8cm、厚さ0.3cm。

工具 (fig. 32) ヘラ状木製品、刀子鞘がある。ヘラ状木製品 (14~16) は、柄と身の部分に区分される。身は受皿状にならず平押面を呈し、先端に向かって薄くなる。14は板目材で、身は平面長円形、柄は上端を三角形にかたどる。側面は、ていねいに面取りされる。残存長22.0cm、柄が11.0cmで、厚さは柄が0.6cm、身が0.4cmを測る。15は柾目材で、身と柄の幅がほぼ同じのもの。柄の上端を三角形にかたどり、側面をていねいに面取りする。残存長19.0cm、幅1.4~1.8cmで、厚さは柄が0.4cm、身が0.2cmを測る。16は柾目材で、身を平面隅丸長方形にかたどったもの。柄の上半を欠損する。側面は、ていねいに面取りされる。残存長12.4cmのうち身の長さは8.0cmで、身幅2.2cm、柄幅1.2cm、厚さ0.4cmである。刀子鞘 (17) は柾目板材を断面凹型に加工し2枚組合わせて鞘とするもので、うち一枚が残る。上半は二次加工を受け原形をとどめないが、下部が上部よりも細身になるもので、外面はていねいに削って仕上げられる。刀身を納める溝は、幅1.9cm、深さ0.3cmで浅いU字状を呈している。下端には組合せのための小孔と木釘が残る。残存長11.0cm、幅1.8~2.8cm、厚さ0.4cmを測る。

服飾具 (fig. 32) 竪櫛、とめばり形木製品、檜扇、下駄がある。竪櫛 (17) は、上半と左右両端を欠損する。歯の長さ2.6cmで、その密度は3cmあたり6本である。歯は鋸で挽出したのち、ていねいに面取りが施される。表裏はやや粗削りではあるが、側面はていねいに仕上げられている。残存長9.6cm、残存幅6.0cm、握り部分の幅3.0cm、厚さ1.0cmを測る。とめばり形木製品 (19) は下端を鋭く尖らせた細長い棒状品で、上端は欠損する。表面はていねいに面取りされ、断面は下半が円形、上半が長円形を呈する。冠帽や鬚をとめる木針とも考えられる。残存長18.0cm、幅0.2~1.0cm、厚さ0.2~0.4cmを測る。檜扇 (20) は骨の一部が残る。短冊状の柾目薄板の下半を撥状に挟め、下端上方でやや幅広くし、端部を丸くかたどったもので、下端近くには綴合せの小孔が残る。残存長20.6cm、厚さ0.2cmを測る。そのほかには下駄一点がある。平面隅丸長方形を呈する迷齒のもので、右半を欠いている。板目材からつくり、歯の側面には鋸挽きの痕跡が残る。台の側面及び周縁はていねいに面取りされ、上面には鼻緒孔が残る。長さ24.0cm、全高7.8cm、台の厚さ1.8cmである。

容器 (fig. 32) 木盤、曲物底板、折敷がある。木盤 (21) は柾目板材を、ロクロ挽きに

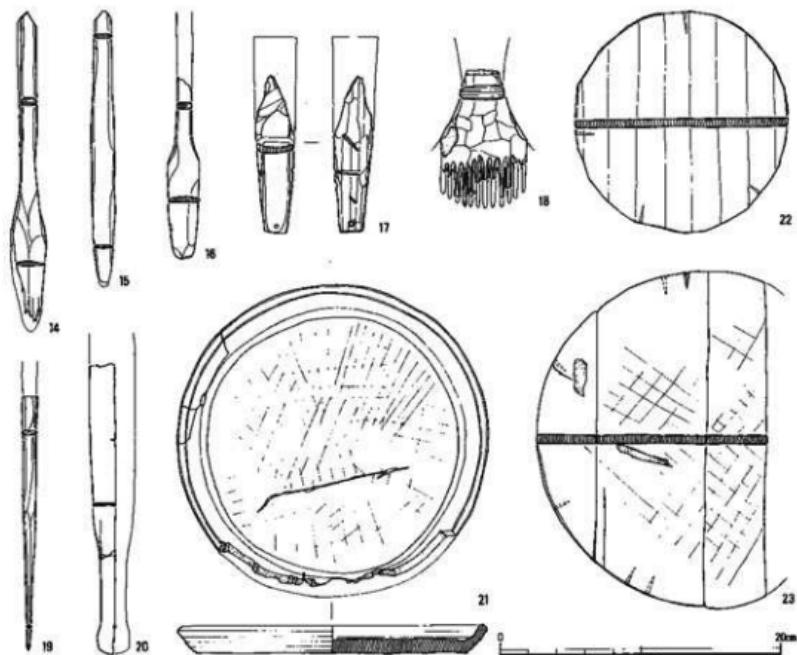


fig. 32 木製品(2) 1 / 4

よって正円形に加工したもので、口縁部内外面にはその痕跡が明瞭に残る。底部内面はていねいに研磨されているが、底部外面は粗い削りのままで、一部には削りきの痕跡もみられる。底部外面には無数の刻線があり、粗板の代わりに使用された可能性もある。口径22.0cm、器高2.0cm、厚さ0.6~1.2cmを測る。曲物はほとんどが底板で13枚が出土した。これらは柾目板材を正円形にかたどったもので、側面には側板をとめた木釘穴が残る。大きさにより、3種に分類でき、径14.0~15.6cmのもの9枚、同18.0~23.6cmのもの3枚、同33.5cmの大型品1枚がある。22は表裏に削り痕跡が明瞭に残るもので、側面の削りの単位も大まかである。径15.2cm、厚さ0.5cmを測る。23は表裏に無数の刻線がみられ、粗板に再利用された公算が高い。径23.6cm、厚さ0.6cmを測る。そのほか、曲物側板の断片や折敷の底板なども出土している。折敷底板は細片で全体の形状は不明であるが、側板を固定する綴穴が認められる。

なお、これら説明を加えたもののほかにも多数の棒状木製品がある。大半は長さ15~30cm、幅0.4~1.0cmの細長い丸棒か角棒で、一端を尖らせたものや、両端を直截したものなどいくつかの形状のものがある。用途については明らかでない。

#### 4. 金属製品、石製品、土製品、錢 貨

##### 金属製品 (fig. 33)

東堀河 S D017下層から、銅製帶金具 (1~7)、鉄釘・鍼 (16~25)、鉄製釘座金具 (8~9)、鉄鎌 (13)、刀子 (14~15)、鉄鏃 (12)、鉄環 (10)、不明鉤状銅製品 (11) が出土した。帶金具は刺金 (7)、丸柄 (1~2)、巡方 (3~5)、鉈尾 (6) がある。1~4には漆膜が残存する。丸柄は、表金具 (1) と裏金具 (2) がある。1は半円形を呈し、下寄りに長方形の透しをいれ、裏面に三足の鉢がつく。2は、板金から作られ、三方に鉢受けの小穴をあける。巡方は、表金具と裏金具 (3~4) がある。5は、表金具、裏金具が組合った状態で出土。表金具は、やや横長の長方形を呈し、表周縁に面取りを施した厚みのある平板で、下寄りに長方形の透しをいれる。裏面に六足の鉢を付け、同形の裏金具と組合わせる。3~4は、四方に鉢受けの小穴をあける。鉈尾 (6) は、U字形を呈した先端に穂をつくる表金具で、裏面に三足の鉢が付く。鉄釘 (16~25) は、鍛造の角釘で、頭部の形状により丸形 (16~18)、方形 (19~23)、環頭形 (25) に分類できる。17~18は、頂部笠形を呈す。19は足の一方向に頭をうち出す。また、頭部の大きさにより、丸形のものは直径 3cm 前後 (16~18) と、2cm 前後 (17) のものに、方形のものは、一辺 2.5cm 前後 (20~22) と、1.5cm 前後 (19)、0.8cm 前後の小型のもの (23) に分けられる。うち、22は完存し長さ 18.9cm を測る。25は環頭釘を組合わせ、番としたもの。24は小型のカスガイである。9は一部を欠くが、八花形を呈すると思われ、中央に長辺 0.8cm、短辺 0.4cm の長方形の釘穴を開ける。鉄鎌 (13) は、刃の先端部と刃部を欠失するが、ほぼ原形がうかがえる。基端部を折返し、柄に対して刃を鈍角に装着することになる。背の弧線から見て、ほぼ刃幅を一定に、中位で強く内側する種類であろう。長さ 22.8cm、背の厚み 0.15cm を測る。刀子 (14~15) はともに、先端部及び刃部を欠く。15は長さ 7.5cm、背の厚み 0.2cm で、茎付根部端を残す。12は斧矢式の鉄鏃である。鋳化が著しく、刃身長 3.6cm、刃最大幅 2.2cm 分を残すのみである。10は鉄心径 0.6cm、直徑 3.0cm を測る鉄環である。11は銅針金の一端を尖らせ、他端を長方形にし、鉤形に曲げたもの。一部に鍍金残る。用途は不明。なお、その他に多量の鉄滓が出土した。

##### 石製品・土製品 (fig. 33)

東堀河 S D017下層から石製鋸鎌車 (27)、石鎌 (28)、土鎌 (29)、石製錫帶未製品 (26)、土製繩羽口、砥石が出土した。27は黄灰色を呈す石製の鋸鎌車である。直徑 3.4cm、厚さ 1.4cm、重さ 23g を測る円盤状のもので、中央に直徑 0.6cm の穴を穿つ。全面に成形時の鑿痕を残す。28は黄灰色を呈す石鎌である。鼓状を呈し、一端を欠いているが長さ 4.6cm、最大幅 2.6cm、重さ 37.6g を測る。表裏 2 面に十字の切り込みをいれ、繩のかかりとしたものであろう。29は青灰色を呈す須恵質の鎌で、長さ 7cm、最大径 2.2cm、重さ 37.6g を測る。両側に板目痕残る。26は丸柄の未製品で、横幅 3.1cm、縦幅 2.4cm、厚さ 0.9cm を測る。全面を平滑に研磨。黒緑色縞入暗灰色を呈する。

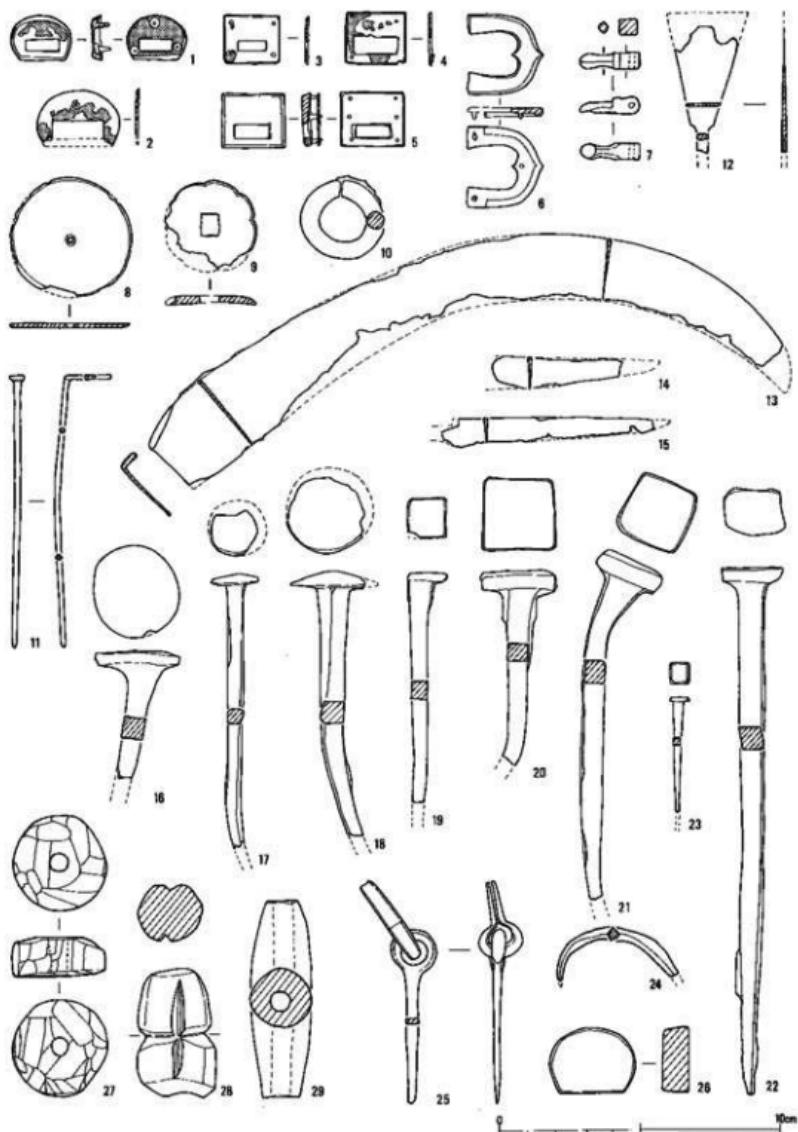


fig. 33 金器製品、石製品、土製品 1/2

### 銭貨 (fig. 34)

東堀河 S D017下層・中層、八条条間路北側溝 S D011から総数で7種・108枚の銭貨が出上したが、その大多数は、SD017下層から出土したものである。ほとんどが完形で、保存状態は良く、銭文が鮮明に残る。以下、種類ごとに銭文、銭型の大小、により分類し、記述する。

和同開珎 総数52枚。すべて開を「開」につくるが、和を内郭寄りに配置し、第三画が短い、いわゆる「降和」が1枚ある。裏面に顯著な範傷を残すもの4枚。範合せが悪く、表裏にいずれのるもの1枚が見られる。重さは、1.9g~4.2gとかなりのバラつきがある。

萬年通寶 総数19枚。年の第四画が横位置につく「横点萬年」が3枚あるほかは、普通の銭文・銭型で、萬はすべて「内」につくる。裏面は顯著な範傷を残すもの2枚がある。重さは、4.3g前後と、3.7g前後に集中する。

神功開寶 総数31枚。功の第二画が内郭側辺に平行せず、「刃」につくり、開を「開」につくるもの26枚。寶の貝を「貝」につくるもの2枚。功を「功」につくるもの3枚がある。裏面に顯著な範傷を残すもの4枚が見られる。重さは、4.7g前後と、3.5g前後に集中する。

隆平永寶 1枚のみ出土。銭型が小型のもので、裏面に範傷を残す。重さ2.4gを量る。

富壽神寶 総数3枚。いずれも富を「富」に、壽を「壽」につくる。重さ3.3g前後である。

承和昌寶 1枚のみ出土。銭型が小型の、いわゆる「小様」のものである。重さ1.9gを量る。

饒益神寶 1枚のみ出土。「小様」のもので、神が中心軸にあるもの。重さ1.3gを量る。

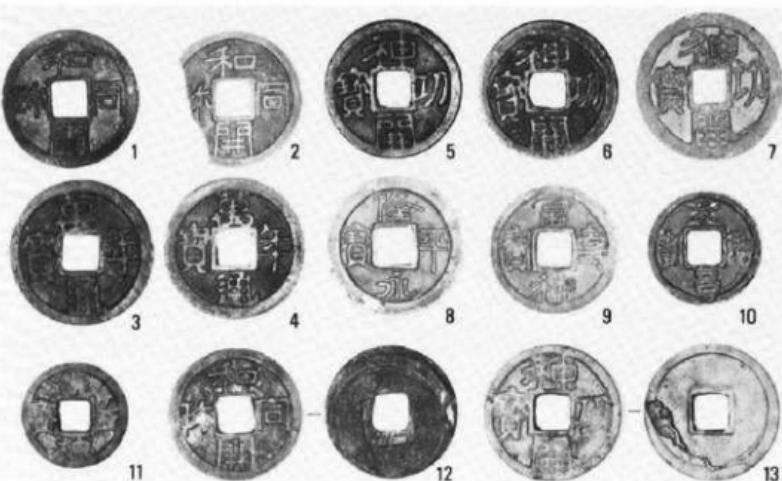


Fig. 34 銭貨 1/1

## IV ま と め

以下に、今回の調査で新たに加えられた知見について簡単にまとめておきたい。

### 検出造構について

① 八条条間路 S F 015は市域推定地の北辺を画す道路であるが、この路面心は平城宮朱雀門心から国上方眼を介して南に2946.920mの距離にある。これに朱雀大路の方眼方位に対する平均の振れ N0°15'41"W を採って、両者間の距離に修正を加えた値は2953.273mである。したがって、この場合に得られる造営単位尺は、修正距離2953.273mを両者心々間の造営計画距離99.80尺で除した値、すなわち29.5919cmとなる。この数値は、第3次調査で確認した市域推定地東辺の南北小路 S F 010をもとに得られた東西方向の単位尺29.5986cmの数値にきわめて近く、単位尺として適当な数値であると判断される。このことはとりもなおさず、八条条間路 S F 015が条坊計画上の位置にあることを端的に示している。

② さて、八条条間路 S F 015は、今回はじめて南北の両側溝を一括して確認し、路面で4.4～4.8mの幅員をもつことが知られた。側溝間の心々幅は、北側溝 S D 011北岸が未検出で正確な数値は不明であるが、南側溝 S D 012心と路面心との距離を折返すならば6.24mという数値を得ることができる。側溝間の心々幅については、過去3回の調査結果をもとに机上で算出した7.63mという数値を先に示したが、今回の調査地点ではこれよりも1m余り狭く、20尺(6m)の幅員で計画されたものとみることができる。

③ また、八条条間路には、南北両側溝のほか、路面中央にこれと平行するいま一条の溝の存在が知られており、その性格が問題として残されていた。今回の調査でも同様に東西溝 S D 014が検出されているが、これは先述のように東堀河 S D 017廃絶の後に掘削されたものであることが確認でき、条坊造構とは直接関係のないことが明らかになった。

④ 東堀河に関しては、従来の調査結果から、その中心が坪の中央を縦断するように計画されていたとみられている。今回確認した東堀河 S D 017では、西岸が未検出でこれの正確な中心を求めることはできなかった。そこで、第3次調査で得られた東西方向の単位尺29.5986cmを使用し、朱雀大路の振れを考慮して十一坪の計画上の南北中軸を想定すると、今回の発掘区内ではX = -148,940.000、Y = -17,174.323付近を通ることになる。この場合、東堀河 S D 017の中心はこれよりも幾分西側に片寄ることになるが、坪の中央に計画されたとみることに大過はない。

調査次数	地 点 名	X	Y	備 考
第4次	八条条間路 S F 015 心	-148,941.410	-17,187.000	路面中軸で計測
	八条条間路南側溝 S D 012 心	-148,944.530	-17,187.000	
	平城宮朱雀門心	-145,994.490	-18,586.310	『平城宮発掘調査報告IX』による。

tab. 2 計測座標表

⑥ 東堀河西岸での十一坪内部の様相についてみると、今回の調査では、先の調査で確認された条間路に面する築地塀の痕跡は削平のためか追認できなかった。しかしながら、第2次調査の場合と同様に、条間路南側溝の南側では築地塀の雨落ちと考えられる東西溝 S D013を検出している。また、東堀河の西岸沿いには南北の掘立柱塀が構築されている。こうした閉塞施設の存在からみて、坪の内部でも東堀河に出入りできた場所は限られていたようである。

⑦ ところで、次には上述の条坊遺構と東堀河の存続期間について触れておく必要がある。これまでの東堀河に関する調査からは、その廃絶の時期が9世紀の前半までであろうことが指摘されてきた。しかしながら、今回の調査地でみる限り、著しく埋没してはいるものの東堀河には9世紀中頃になんでも木橋の構築が成されている。しかも饒益神寶（859年初鑄）の出土が示すように、条間路側溝も少なくとも9世紀中頃過ぎまで存続したことが確実となった。こうした様相は、從来の東堀河廃絶の年代観と隔りをもつもので、今後に問題を残すことになった。同時に、今回の調査地周辺が、遷都後もかなり長期間にわたって、平城京の機能を踏襲している事実は、今後この地域を解明してゆく上での貴重な資料を提供したといえよう。

#### 出土遺物について

⑧ 出土遺物、とりわけ土器について注意される事項を、二・三記しておこう。東堀河の堆積層が概ね3層に分けられ、各層出土土器には、明確な時期差がみられることは、本文中で既に述べたところである。また、各層出土土器に、明確な形態変遷を示すものがみられる。須恵器壺Mは、各層から大量に出土しているが、各層出土の壺Mを比較してみると、明らかな型式の変遷を追うことができる。壺Mの形態分類については本文中に既述したが、底部形態からみると、高台を付すもの壺Ma、高台状の段稜をもつもの壺Mb、平底を呈するもの壺Mcに分類でき、底部切離し技法からは、ヘラ切りのものと、糸切りのものの2種に分類できる。各層ごとにみると、下層では底部ヘラ切りとする壺Maのみが出土しており、器高が一定で作りも丁寧である。中層においては、底部糸切りのものへと変化し、壺Ma・Mb・Mcの全ての形態のものが出土している。上層についてみれば、高台を付す壺Maは全く出土せず、壺Mb・Mcの2種が同様に出土しているが、器高に大小がみられ、作りは粗雑で、瓦質を呈するものもみられる。下層・中層・上層の壺Mの比較から、8世紀段階においては底部ヘラ切りで、高台を付す定量化したものであり、9世紀初め頃から糸切りへと移行、9世紀末には高台を付すものは既に消滅し、焼成が軟質で、作りの粗雑なものへと形態の変遷がよみとれる。従来の編年観では、以後壺Mは更に粗雑化し、10世紀後半には消滅しているものと考えられる。

⑨ また、各層における器種構成についてみると、下層は須恵器、土師器とともに8世紀初め頃からの器種構成を比較的踏襲するが、中層、更に上層へと時期が移行するにつれて、須恵器においては、壺M、壺H等、少數器種の占める割合が増加し、限定された器種への生産の集中化が進行した須恵器生産の衰退をうかがうことができる。

平城京東市跡推定地の調査Ⅱ

第4次発掘調査概報

昭和59年3月28日 印刷

昭和59年3月31日 発行

編集・発行 奈良市教育委員会

(奈良市二条大路南1丁目1-1)

印 刷 共 同 精 版 印 刷 株 式 会 社

(奈良市三条大路2丁目2-6)

